

こえきぐるみをぬるて  
お手足を奥太じむじゆ

よどまつ  
夜灯祭り

木部の春草の音ひを聴へず

吉川山本一承

村上雅子

白き闇る  
青柿やどの夕暮れを歩こうか

こむ風む  
夜灯祭り終りいい手をしているね

三人のせ  
雉子を見た少年は天竺木綿

十二月十

大櫻蝶のねむりの中にある  
椿より遠く離れて髪を切る

鷺合わ星  
青栗の下の一揆に加わりぬ

みぬ息の  
夕蟬になるまで母は布洗う

太平縣盛

花こぶし脱ぎすてている地球かな

吉川山本一承

吉川平一本齋美子

朝日の入る音くづんで朝の音

青子コメの光の風ひを立す

春暖季節のう遊來喜び笑ひ

お隣の頭の聲ひ水響き

もとめのう遊來喜び笑ひ

金魚池の南邊地平す

日ひ一束め残す葉見す

毛首ある又浦さ留鐵の平である

毛手う鼠の公則を鄰う遊來の交

寺崎きつねを遊良斗品ひ遊へ

草東田川晉子

雪笛き口きりひきう歌う歌す

寺千御ふす日へさじまの隠の煙

潮の音のやまゆみよぶみ山茶井す

ひの不あゆつをぬる時すひ煙

私より日焼けしている父の遺書

被爆図の中で鶏飼つてゐる

夕焼けの壁にその後の海を描く

麦飯を食べて地球の薄ぐもり

いつほんの紐ではこわい濃あじさい

力みんなあげるよ冬の影法師

冬の来る田んぼは甘い力です

鐘が鳴る一里四方に徽咲いて

晩鐘へまぎれこみたる白き桃

外套の中の水平線に逢う

桃の日へ流れて行つた二等兵

墓洗う男の中の嵐かな

受賞のことば

七月四日、この日は、東京では加藤楸  
邨先生の葬儀が行なわれていましたが、  
その同じ時間に私は思いがけなくいただ  
いた九州俳句賞の祝賀会（熊本）の席に  
いました。

先生と北山ダムでお逢いして、すっか  
り俳句の魔力にとりつかれ三十年余り過  
ぎてしまいました。

「俳句の中には人の生きること、生活  
の真実を地盤とした俳句を求め、物の真  
実をぎくりとする力で掘みとめて欲しい  
い」といつも言われていたことを痛切な  
悲しみの中で思い出しています。

祝賀会の席上でいただいた、寄せ書き  
の中に、先生の言葉を短く的確に表現さ  
れている「土臭く、人間臭く」に出逢い、  
これから乾いた抒情で「土」や「人」を  
描くことが出来ればと思つています。  
(「九州俳句」より転載)